

湯の丸高原ビジターセンター（自然解説文④環境）

上信越高原国立公園（じょうしんえつこうげんこくりつこうえん）は全国で 2 番目に大きい国立公園で、群馬（ぐんま）、新潟（にいがた）、長野（ながの）の 3 つの県にまたがる。1949 年に国立公園に指定され、148,194 ヘクタールの山岳森林と高原からなり、2 つの活火山がある。その広大な園内には多様な生育環境が存在し、実に多彩な野生生物の命を支えている。

湯の丸高原（ゆのまるこうげん）は公園の南端に位置し、浅間・烏帽子（あさま・えぼし）火山群西側の峰々の間にある。100 万～10 万年前にかけての火山活動で形成され、西側にある烏帽子岳（えぼしだけ）（2,066m）と湯ノ丸山（ゆのまるやま）の隣り合う二峰から、東側にある西簗ノ登山（にしかがのとやま）（2,212m）、東簗ノ登山（ひがしかごとやま）（2,228m）、水ノ塔山（みずのとやま）（2,202m）にかけて広がっている。これらの山々の間にある高原地帯の標高は 1,700～2,000 メートルと幅広い。この標高域は一般的に亜高山帯として考えられているが、その地形と気候の要素が独特の相互作用を及ぼしたことで、通常であればさらに標高の高い場所でしか見ることのできない高山種の生態系が維持されている。

湯の丸高原の平均気温は夏が 21℃、冬が -5℃ と、年間を通しての気温差が比較的大きい。日本海から冷たい空気が流れ込み、冬は豪雪地帯となる。北側斜面では、降り積もった雪が極寒の気温でも木々の成長を守ってくれる一方、山の南側斜面は日差しを多く浴びるため雪が解け、冷たい気流と暖かい気流がぶつかり強風が発生する。これらの気候条件から、南側斜面で成長する植物はほとんど低木や矮性種が多い。